

---

# 夢想椅子尻少年少女への何か

宇ノ鹿 すい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢想椅子尻少年少女への何か

### 【Nコード】

N9366R

### 【作者名】

宇ノ鹿 すい

### 【あらすじ】

ああああああああああああああ。

暗闇の中にいるとくつきりと浮かび上がってくる輪郭が向こう側にあつて、それは思ふのだけれど、のっぺらぼうだ。目鼻口が無く、輪郭だけがある顔に、乳首にあたる部分に両眼があつて、ヘソにあたる部分に唇がくっ付いている。しかし唇は縦にくっ付いているものだから、奇妙だ。気持ち悪い。乳首の部分に付いている両眼も、黒目と白目が逆になっているから不思議。しっかりとその眼で物を見ることが出来ているのだろうか、と、気にかかつてくる。夜目が冴え渡っている中で、ずっと気にかかつていて、永遠に気にかかつていたいとも願う。

頭の中で、蝙蝠が洞窟で羽ばたいている間にずっと唱え続けるあの呪文、解せない呪文をのっぺらぼうは縦の唇をぱくりと開くことで呟いてみせた時に、ああ最悪、と不埒なものを感ぜられた。のっぺらぼうと眼を合わせていることがもう嫌だったので、足を上げて、逆立ちをしていた過去のことかふとよぎった。関係の無いことだったので気にもせず、居間に降りて、二度と動かない系のちぎられてしまった人形の一体、を、拾い上げたけれど、それが何だったのか、何と呼称される物体だったのか、忘れてしまっていた。のっぺらぼうのせいだ、と慌てて、人形を胸に抱きしめたまま居間から出てみると、空間が途切れていたから先に進めなくなっていた。或いは、元に戻れなくなつて。「ねえ、なんだったっけ」人形になるべく優しく聞こえるような声音で話しかけてみたけれど、空間の途切れているのをじっと見つめているだけで、応えてくれない。だからあだ名を考えてそれを人形の、仮の名にしてみる。無言のまま動かないから、あだ名は、むごん。でもやっぱりださいと思つたから、そんなあだ名のはずくに忘れた。その代わり、逆上がりすることを思い出した。三日月に向つて足を出して、くると弧を描いて、宇宙を飛んだような気持ちになつた昼間。校庭に誰もいなく

て、みんな授業という名目で箱庭に閉じこもっているのを小馬鹿にしていたような、ひどく哀れんでいたような、昔の記憶。でも逆上がりをして二十回くらいに繰り返した頃に、もう一度弧を描いた時に思い出したんだ。そうだった。プール掃除をするんだったつ、て。

一人で向ったプールサイドには本物のお月様が映り込んでいたけど、そんなことを気にしていることはすぐに止めて、プール掃除を誰が代わりにやってくれたようだと感心していた。足をその水に浸からせてみると、温泉のように暖かいのだと驚く。慌てて服を脱いで、プールの中に身をうずめてみると気持ち良かった。だけど途中で頭を誰かに押し込められて、苦しくなつて、うー、うー、と必死に抵抗をして頭を抑え込んでくる奴に足蹴りをかましてやりたかった。けど温泉の中に浸かっていた、ふやけてしまった体は鈍つたらしくて、重たくて、足蹴りなんて水圧にも邪魔されて出来なくて殺されてしまうのかなと泣きたくなつた。その時に、頭を抑えていた奴の声が聞こえたような気がした。「ふにやけた、ふにやけ。なんだか、わかる？」

途端に、温泉が全て冷水に変わった。違う、血が冷えたんだ。とも思つたけど、温泉が冷水に変わったみたいで困つた。困っている内に、排水溝が水を飲み込んでいく音が轟いていたから、気が付いた時には服を脱いだ姿でプールサイドに横たわっていた。下着を付けておいてよかった、恥ずかしくないや、と思いながら、むくりと起き上がって頭を抑えこんでいた奴はどこだ、と思つていたけどすぐに見つかったから、「わかるよ。そのことについて話したかったけど、上手にできないんだね」と優しいふりをして話しかけてみた。すぐにそいつは応えた。

「ふにやけはさ。探していたけど血が噴き出ちゃったから、もう持ち歩けないもんで、いまのところ牢屋にぶち込んであるんだ。今度一緒に、出会いにいかない？ あなたを担いで行くのは私だから問題はないんだし」

「いいよ。暇だから。箱庭に閉じ込められているよりは、箱庭から

飛び出たと勘違いできる箱庭の方が大人になっただけだと思って、気持ち良いんだ。ふにゃけは血がたくさん出たのに、大丈夫だったの？  
生きてるの？」

当たり前さ、と得意気に胸をどんと叩いてから、服を二着取り出して、自分の分と、こっちの分、と言った風に分け与えて、プールの浴槽の中からのっそりとした動きで出て来た。服を着替えるのは丁度同じくらいの速さだったけど、なんだか気恥ずかしい時間だから、一生の中でも忘れることがあまりない着替えの時間だったと思う。

暗闇に再び戻ってきて、眼を何度かしばしばとさせてたけど夜目があんまり冴え渡ってくれない。眠気がもうじき訪れて瞼が降りちゃうなと経験から知っているから、寝室に向うために居間を通り抜けようと戻った。だけど、空間の途切れが居間にも生じはじめていたから、はやくしないと寝室に繋がっている空間も途切れてしまつて瞼が降りちゃう時に気持ち良く眠れないや、と焦って、走つただけで人形を落としてしまった。人形の首はもう垢まみれで汚れていて、いまにもちぎれそうな程にボロだったから、落とした衝撃でとどめが変わっちゃったのを見て、別に悲しくもなかったのが、ちよつとむなしいなあつて思えた。空間に向けて走りながらそんなことを考えていると、ふと、なんで人形しかここにはいないんだろうと不気味に思つて、親近の人を捜し出すために千里の道だつて行けばいいのにと呟いてみたら、その瞬間にのっぺらぼうが途切れていた空間のその、隙間を縫うようにして現れた。「人間なんていないよ。のっぺらぼうの僕がいればそれでいいじゃない」抑揚の無くて気持ちの悪いのっぺらぼうは、それが本性みたいだったから怖くなつて、道を戻つて人形を抱きしめたけど、首がないから、かえつて嫌な気分になされた。仕方が無いから居間のちゃぶ台に置かれていたサングラスを装着してから、昨日見たテレビでやってた魔法の動きを真似してみた。悪い心で呪えば相手は罰され、良い心で呪つても相手は罰されるという魔法の動きを、昨日、夜目が冴え渡

つていた時にずっと練習してた。失敗したしつまんなかったりいら  
いらさせられたり大変だったけど、今は自信があるから、はりきつ  
て、サングラスをつけたり外したりしながらムーンウォークをして、  
最後に月光蹴りを決めた。月光蹴りはヒーロー村雲しか出来ない必  
殺の技だったけど、案外頑張ったら出来る。これで魔法の動きは完  
成させられる。魔法の動きは月神を呼ぶという話だったから、それ  
がどんな人なのか楽しみで、わくわくしてて、「のっぺらぼうなん  
てどうでもよくなって、もう怖くない、ただの気持ち悪い人。たっ  
た今、もうこっちから呪ったんだから。」

「お前、なにかしたか？ 月光蹴り、格好よかったぞ」

唇がぴらぴらと左右に開くのが最悪に嫌だったはずだけど、月  
神さまの姿を想像することが心地よいから、のっぺらぼうのことも  
許せるようになってた。「ありがとね」一日中頑張って完成させた  
月光蹴りの技のキレを褒めてもらえたし、あとはもう月神さまが目  
の前にでも後ろにでも額縁の裏にでも、とにかく何処でもいいから、  
現れてくれれば全部それで満足なはずなのだけだ。

何時になっても現れないから瞼が閉じてしまいそうになってしま  
う未来がやってくるかも、なんて思いを馳せてしまうくらいに月神  
さまは落下スピードが遅い。降臨するなら、すわっと、瞬間的に現  
れてくれればいいのに。きっと降臨する神々しい存在は、勿体ぶつ  
た偉そうな速度で、お茶でもお茶碗に注ぎながら、月にある自宅で  
今頃ようやく重い腰を上げ始めて、どんな降臨の仕方が演出的に格  
好いいかな、とかやってるのかもしれない。「いやー、面倒くさい  
けど俺、月神だしなあ」みたいな、うざったらしい感じの性格に違  
いない。

なんだかむかついたから、月光蹴りをもう一度やってみようと思  
って、足を振るった。すると「ワンダフォー！」とのっぺらぼうが  
褒めてくれるけど、自分の唇が気持ち悪く動いてることをのっぺら  
ぼうは知らないもしくは忘れてる、あるいは、こっちが嫌な思い  
をしているのを知っててわざとやっている。もう構わずに、足蹴り

を何度もした。必殺、月光蹴り！

ある時、月光蹴りをしていたら空間が裂けた。びっくりしたけど、のっぺらぼうはもつと驚いたと思う。だって、その裂けた空間から出て来た人物が一人いたのだけれど、その人はのっぺらぼうの恋人だった奴だったのだから。だけど一瞬だけで、すぐに空間の隙間に隠れてしまったから、のっぺらぼうは慌てて唇をぱくぱく開いてから、恋人の後を追うようにして、空間に飛び込んで行って消えた。空間はのっぺらぼうが隙間に入り込んだ途端に、貝殻が閉じるようにして、居間の風景を元通りに戻したから、人形たちの姿が再び見えるようになった。まだ残っていた空間の裂け目にわずかな人形たちを全部放り込んでから、自分もその裂け目に入り込もうとしたけど、その直前に貝殻が閉まって、自分だけ取り残されちゃったから、なんにもかんがえなくなっちゃった。

で、ぼや、とした白い霧が思い出の景色を作り出して行って、ふと気が付くと箱庭の記憶に飛翔していくんだとなつて、月に向つて飛翔していた。月面のクレーターの一番へこんでいるところに着陸してから、旗を立てると、月から地球を眺める。夜目が冴え渡っているから、地球の蟻んこですら見えているから、校庭の位置を探り当てるのも簡単なものだ。

「いつてくる」月神さまに別れを告げてから、ふわつと宇宙を舞う。スペースデブリにぶつからないように月神蹴りを無限るーぷで繰り返しているから乳酸が溜まったけど、月神蹴りという最新の必殺技は身体に負担がかからない必殺技だから、一億回繰り返しても大丈夫。だから百人乗っても大丈夫、ってわけにはいかないしそれは別の話、と思っている内にはもう、校庭で逆上がりしていた。

まだみんなは箱庭の中で授業というものをやっているらしかったけど、逆上がりで月光蹴りを覚えることの方が重要に決まってるんだから外に出ればいいのにと、一回くると回るたびに呻いていたら、耳元でこそばゆい、囁くような声が生じた。「そう思うのはね、きみがわたしに怒られて授業を受けるのがもう嫌になっちゃったか

らだよ。友達とも脛蹴りをしあつたばかりだからだよ」

何時の間にいたんだろう。と思つて呑気にくるくるしてたら、鉄棒の鉄の部分がそいつに握り締められていて、握力だけで、鉄が溶けた。熱を当てられたかのように、溶けちゃつてた。それにふと触つてみると、あまりにも熱いせいで右腕が全部溶けちゃつた。骨まで残らず、溶けちゃつた。

「どうしよう。助けて」

でももういなくなつてた。耳元で囁くように言葉を告げた癖に、もう影も形も見当たらないから、校庭には再びひとりぼっちの自分がいた。逆上がりも出来なくなつたし、右腕も無くなつてしまつたのだから、何がこれから先出来るのか、あてが見当たらない。空を見上げたら、雲が流れているのが成り行きで、助言もなく、仕方が無いから教室に戻つて授業を受けようと思つている道の途中に、気が付いた。みんなは、受け入れてくれるだろうか、片腕の自分を。

不安のあまりに吐き気をもよおしてしまい、保健室に向つて体温計で熱を測ってもらつと、三百八十六度という数字が出てきたから、思わず顔を上げて、体温計をさつき渡してくれたばかりの人のことを見てみると、三百八十六度の熱のせいで、皮膚がただれてしまつているのに、無理をしてこつちに微笑みかけようとしている人だつた。だけど、無理をしているから、引きつった微笑みになつていて、見れたものじゃなかったから、申し訳ないあまりに泣きたくもなつたけど、泣くわけにはいかなかった。涙は蒸発して霧になり、眼を焼いてしまうと直感が忠告したから。本当かな？と疑問に思つていると、耳元で再び囁かれたような気がした。けど、勘違いで、幻聴だった。保健室を全て溶かしていく途中で、教室の箱庭から飛び出してきた、もつとも頭の良い人間として注目していた人が、三百八十六度の熱の影響をすぐに受けて、皮膚をただれさせてしまわされた。三百八十度の熱のせいで。「誰のせいだ？」頭の良い人間は独り言のようにして、尋ねてきた。だから答えた。

「自分でも、夢ならいいと思つてるんです」



空間が怒り出した。無責任な言葉に対する報復だと思う。空間は三百八十六度など物ともしない圧迫感で次々に、自分のそれを折りたたんでいき、ついでにこちらのことも折りたたんでしまうようだった。だから逃げなくちゃぺちゃんこにされてしまうはずで、焦ってしまふ。でもお尻が、熱のせいで、鉄にくっ付いてしまい剥がれない。「そのまま逃げるしかねえよ。あわれな椅子尻」

言われる言葉に涙しながら、保健室を後にする。

押入れの中で、随分と身を隠すことになったのは、椅子尻と呼ばれた屈辱を永い間引き摺っていたからだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9366r/>

---

夢想椅子尻少年少女への何か

2011年11月12日18時40分発行